

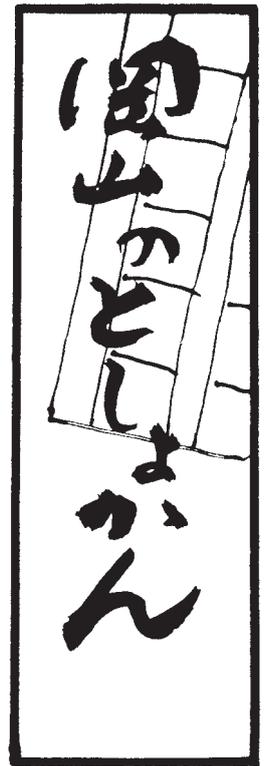


新設図書館の紹介

岡山県立倉敷天城

高等学校図書室

加藤 省子



No.107

本校は今年度で創立一〇二年を迎える、歴史と伝統ある学校です。平成十七年度から校舎改築工事を行い、図書館も新しく生まれ変わりました。図書館は建物の一階、昇降口の横、職員室から徒歩五十歩という絶好の場所にあります。窓が多くて明るい開放的な空間となりました。蔵書は約三万六千冊、座席数は八十五席あります。中高一貫教育校ですので、中学生と高校生が図書館を共に利用しています。そのため本校の蔵書は、中学生から大人までの幅広い年齢層に対応できる構成になっています。加えて、現在SSH（文部科学省スーパーサイエンスハイスクール）の指定を受けていることからわかるとおり、理数系を得意とする生徒が多いので、自然科学分野の資料が比較的多い構成となっています。

本校の一日をご紹介します。

朝は七時半から教員が交代で図書館を開館します。毎朝二十人程度の

利用があり、特に定期考査前の朝の開館は好評です。そして中学生は毎日「朝の読書」を行ってから授業開始です。高校生は年間に五週間だけ「朝の読書」を行っています。「朝の読書」を楽しんでもらうために、図書委員が図書館から十冊程度の本を選んで教室に持って行き、貸出しています。今回はこんな本を選んでほしい、この作者の別の作品を紹介してほしい、今回の持ってきた本は面白かったなどの声が図書委員にかけられることも多いそうで、図書館を教室に紹介するきっかけになっているようです。

日中は図書館を調べ学習の授業で使うことがあります。県立図書館の資料搬送事業によって、生徒一人につき少なくとも一冊の資料が行き渡るようになりました。本校では調べ学習で使う資料については、その該当学年の図書委員に資料を集めてもらいます。本校の図書だけでなく、県立図書館の資料も検索して予約をかけ、展示するところまで図書委員が行います。図書委員が準備することで、生徒からの視点で資料を集めることができ、また他の生徒からの資料の要望を受け取りやすくなっています。

昼休み、放課後のカウンターの対応は図書委員が務めます。カウン

ターに生徒がいるだけで、利用する生徒は図書館に入りやすくなり、本の相談などもしやすいようです。守秘義務の問題や入力ミスなど難しい面もありますが、図書館を身近に感じてもらういい機会なので、図書委員会の最も重要な活動として位置付けています。

清掃も図書委員が行います。毎日来て清掃することで「自分たちの場所」という気持ちをもってほしいというねらいがあります。

放課後は五時までの開館ですが、月曜日と水曜日は教員の協力を得て六時までの延長開館を行っています。

このように「いつでも開いている」「資料が必ず手に入る」「使いやすく居心地がいい」「誰かが必ず見てくれる」という図書館でありたいと思っています。教員の協力はもちろん、生徒自身による図書館運営への関心と参加が必要です。まずは、図書館に関わる教員や生徒がきめ細やかに対応をすることで、「図書館に行く」ことを特別に感じないでもらえるようにしたいと考えて取り組んでいます。

そしていつの日か、「生徒が自分たちのために自分たちでつくる図書館」が生まれることを夢見て今日も開館しています。

ICタグの運用 導入館の状況

倉敷市立中央図書館 渡邊 隆男

倉敷市立中央図書館では、平成二十年一月五日よりTRCのゲート検知システムを導入（五年間のリース契約）しました。これは、平成十七年度に当館で発生した「玄石文庫」紛失問題に対応する蔵書管理体制見直しの一環によります。

このシステムは、ICタグにより図書の不所持を防ぐものです。対象とした図書は、郷土資料や参考図書など三万七千冊となっています。システム稼働の準備作業は、次のようになります。ICタグをエンコード（バーコード情報を登録）して図書に貼付する。図書館システムから対象図書の情報を抽出編集し、ゲート検知システムに登録する。いずれもカウンター内での簡易な作業です。



ゲート



ICタグを貼った状態
タグの大きさ：6.5cm × 3.5cm

図書の貸出返却は、通常処理に加えてゲート検知システム機器による処理を行います。この貸出処理を行わず、館外に持出そうとするとゲートで感知してアラームが鳴り、カウンター内の端末画面に書名などが表示されます。また返却処理をしていないとアラームは鳴りません。

このシステム導入について、当館における問題点や課題をあげてみます。現状では、図書館・ゲート検知システムと二重の貸出返却作業が必要となっています。これは、次期システム更新での課題となります。専用機器のないカウンターでは貸出ができません。機器増設などが課題となります。利用者の所持する他館のICタグ類にも反応してアラームが鳴ることがあります。これはTRCに、システム改善を行ってもらわなければならない。繁忙時にゲートにて出入が集中すると、アラームが鳴っても持出者の特定が困難となります。これは今後の課題です。貸出返却時に、対象外の図書（利用者所持など）が付近にあると一緒に感知します。貸出返却台の設置場所等の工夫が必要となります。ICタグの貼付場所に困る図書があります。タグ貼付が目につかないことが必要だと思えます。不正持出の検知のみに止まらず、自動貸出や蔵書点検など

にも対応可能なシステムになれば、利便性がさらに向上するものとなると思えます。

現状での当館におけるゲート検知システム導入による最大の効果は、「図書の不正持出抑止」にあります。不正持出をするとアラームが鳴ること、出入口に検知ゲートが存在すること、これらが不正持出への大きな抑止力となっていると考えられます。

新見公立短期大学附属図書館

小川 政保

先日、新見では一度大雪が降り、朝の出勤も大変でした。雪道での運転に慣れていたはずの私は、昨年暮れに冬用タイヤを新しくしたこともあり、短大の登り坂をマイカーで上がり始めたものの、途中から滑って登らず、朝から驚嘆しましたが、それ以降積もるほどの雪も降らず、温暖化？と思っている今日この頃です。

新しいといえば、当館は、二〇〇八年四月、本学敷地内にオープンいたしました新見市学術交流センター内にあり、その建築、図書館移転に併せてICタグ導入の検討を始め、現在ICタグによる新しい図書館システムでの貸出し、返却を行っています。

ICタグの導入による最もわかりやすい変化は、やはり貸出し、返却の処理でしょう。ICタグが貼付された資料は、貸出し、返却の際、カウンター上に設置された受信アンテナの上に置くことで一度に読み取られます。読み取り可能冊数は資料の厚さや大きさにも影響されますが、一度に十冊から十五冊程度まで読み取り可能なようです。ICタグを利用した新しい方法では、始めに従来通り利用者カードをバーコードリーダーで読み、つぎに資料は受信アンテナで一度に読み取るので合計二回の読み取り操作になります。さらに利用者カードもIC化されている場合は、資料と一緒に一度の読み取りで貸出し手続きが完了します。本学でもICタグ導入検討の際、学生証もICカード化し、利用者カードと併用する案も話には出しましたが、このときは将来的な構想に留まりました。また、当館ではカウンターの一角にタッチパネルモニターと利用者用のICタグ受信アンテナを設置し、自動貸出返却機として運用しています。これにより、利用者は貸出し・返却手続きをセルフサービスで行えます。

しかし、それと同時に、貸出し・返却業務は図書館職員にとってより多くの利用者と接することができる

重要な専門的業務であるとも思っています。直接貸出し・返却業務にあたることで利用者の読書傾向を知ることができ、また、短期大学附属図書館であるため、学生との情報交換の糸口にもなりうる業務ではないかと思えます。図書館業務において効率化にばかり目が向くことには少し疑問が残るものの、当館のように少ない人数での確に利用者サービス業務を行うためには貸出し・返却の効率化はやはりありがたいことには変わりありません。

ICタグの導入について、当初は蔵書紛失防止の点から検討に入り、磁気テープ等の検討もしましたが、ICタグに併せた新しい図書館システムを予算化するためには、ICタグの利便性、必要性を市に理解していただかなくてはなりません。導入は決まったものの、オープンはずいぶん前に来ており、二〇〇八年一月から四月オープンまでの準備の日々は本当に生忘れれることのできないものになりました。

一月、新館への蔵書移転、二月、蔵書へのICタグ貼付作業、三月、ICタグエンコード作業。まったなしの日程の中で、これらの作業の適切な計画と実行が最重要課題でした。蔵書移転は全教職員で、ICタグ貼付は全学科の学生の力を借り、

エンコード作業は事務局職員に分担していただき、今思い出しても信じられないようなめまぐるしさで消化されていきました。教職員、学生の協力を得てICタグの導入、そしてオープンに漕ぎ着けたことは本学にとって大きな誇りとなりました。



ICタグによる
自動貸出返却機

赤磐市立中央図書館 三宅 康栄
昨年、六月六日午後一時、ICシステムを採用しての図書館運営がスタートしました。

赤磐市立図書館におけるICシステム導入のねらいは、無断持ち出しなどによる不明本をなくすこと、自動貸出機による人件費の削減、蔵書点検期間の短縮および利用者のプライバシーの保護などでした。

赤磐市がIC導入の検討を始めたのは平成十八年頃からです。まず、ICを採用されている全国の図書館にIC導入によるメリット・デメリットまたそれぞれの館における感想や運用状況を聞きました。そしてその上で、当時はICタグだけでなく、タトルテープという選択肢もあり

りましたが、一度に複数冊の処理が可能なICタグを選択しました。

その後は、図書資料と視聴覚資料についてどのICタグを採用するかで検討を繰り返しました。

それにより、全国でも珍しい図書資料と視聴覚資料のタグ業者が別々という状況になりました。そのことからゲート及び図書館システムなどに対し、両方のICタグに対応できるように調整していくことが必要になりました。これについては業者努力により両方のタグを読み取るシステムが完成し、運用の運びとなりました。それから早いもので九ヶ月が過ぎました。最初は、職員も慣れないため処理に手間取ったり、うまく読めていなかったりと、トラブル続出でしたが、現在ではスムーズに運用できていると思われまます。自動貸出機も約二十二パーセントの方に利用されています。

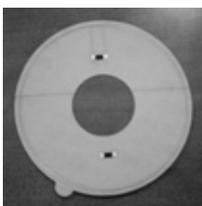
しかし、今でも時々貸出処理ができていなかったのか返却時にゲートが鳴ることがあります。かなり慎重に貸出作業を行っていますが、やはりミスがあるようです。また、ある時は、貸出処理をしていない資料を持ってゲートを通過してもゲートが鳴らないこともありまました。業者に尋ねてみると、重なっていたりゲートの電波の出方などで、まれに読

まないこともありまます」というような回答でした。人的ミスはできる限り避けたいと考えていますが、システム上の問題点もあるように感じまます。

そして、二月に五日間休館して蔵書点検が終了しました。一台のリーダーライタで、一日に約一万五千冊の資料を読み取ることができました。導入時のコストは大きなものでしたが、蔵書点検における人員・時間の削減については、それなりの効果があったと思います。

これからも、ICシステムによる図書館運営を進めていく上で、様々な課題が出てくると思いますが、それを一つ一つ解決しながら、このシステムのメリットを最大限に生かせるような運用を行なっていきたいと考えています。

直接貼付型 CD 用
IC タグ



☆個人会員の紹介☆

倉敷市立船穂図書館 司書

小野 紀子



昨年、県協の総会席上で、図書館功労者として表彰していただいた。とうとう勤続二十年の「ベテラン」(?)になったということになる。新卒当時はバブル景気のただ中で、倉敷市でも一九八三年に中央図書館新築とコンピュータの運用開始、一九八五年に水島図書館新築、一九八八年に玉島図書館新築と、児島図書館を含めた市内四図書館のオンライン開始、一九九三年にライフパーク倉敷図書室開館と新館バブルに沸いていた。

この間貸出数は、一九八三年度の八十五万五千点から一九九三年度には百八十二万五千点と十年間で倍増し、ほぼ毎年のように司書が採用された。ところが、一九九七年を最後に司書職の採用は途絶えている。その後合併した船穂図書館・真備図書館を加え、二〇〇七年度には貸出数

が二百八十二万点になったが、最大で三十二人いた正規司書は、船穂・真備を加えても現在二十七人と逆に減っている。一方で嘱託・臨時・派遣職員は二十人。パート職員を含めると非正規職員の占める割合は格段に大きくなった。

さて私は、二〇〇六年倉敷市との合併による図書館オンライン化と同時に、船穂図書館に異動してきた。人口七千三百人、面積十一km²の船穂町には長い間図書館がなく、そこで育った私もきょうだいも隣接する倉敷市の図書館を利用していた。

一九八二年、船穂町民会館の中に、ささやかながらも待ち望んでいた図書室ができた。二〇〇〇年には、延床面積八百六十八m²、収蔵能力六万九千冊の船穂町立図書館が開館したが、サービスマスを担う正規司書の採用はなく、嘱託・臨時職員だけで図書館を運営する時代は続いた。

故郷の図書館に初めての正規司書として帰ることが決まってから、自分に求められていることは何かを考えた。倉敷市と同等のサービスマスを提供するという命題は与えられていたが、それは内外の先輩方から教わった知識と自分の経験とを生かす機会を与えられたのだと理解した。

作りたい図書館のイメージはあった。本との出会いを演出し、利用者

に信頼され「また来たい」と思ってもらえる図書館にするよう、選書の変更や古い本の除架、棚の配置換えなどを行った。おかげさまで、二〇〇五年度に二万点だった貸出は、二〇〇七年度には七万七千点を越え、二年間で三・八倍の伸びを記録した。入館者は一万六千人から四万三千人になり、職員による読み聞かせは七回二十七人から、二百十六回九百七十二人に充実した。また予約は百七十二件から、一万件までに増えた。

利用増の要因の一つは、地理的に近い西阿知・玉島地区からの利用者が増えたことであろう。そしてもう一つは、図書館のネットワーキ化、視聴覚資料の貸出、子どもの読書活動推進、インターネットでの資料情報提供と予約の受付など、倉敷市の図書館が積み重ねてきたサービスは、船穂町でも求められていたということではないだろうか。また同時に、職員個々の資質と専門性の向上、情報と技術の伝承の成果でもある。

最初の話に戻ると、現在の私の同僚は嘱託職員3名とパート職員4名だ。彼女らの中には、新たに通信教育で司書資格を取得した者、ストーリーテリングを始めた者、公募の図書館協議会委員に任命された者、図書館ボランティアとして布絵本を作

成した者などもある。かつて私が内外の先輩方から伝承されてきたことは、任期付である彼女らから今後どのようにに伝わっていくのだろうか。ともに図書館サービスについて学んだ全国の仲間の中には、他部署に異動したり、他部署で行政職としての経験を積んだ後図書館の管理職として復帰したりした例もある。

今後の図書館情勢を思うと、立場を超えた仕事の伝承と、自治体職員としての視野も持った司書の育成を考えざるを得ない。実感としてそう感じているアラフォーの今日この頃なのだ。



図書館のディスプレイ②

「金光さつき図書館」

小野 優志

私たちの金光さつき図書館は開館から六年が経過しました。各種のイベントは記録してきましたが、壁面飾りなどのディスプレイは、写真等では残していないので、記憶をもとに振り返ってみました。

当館に来られた方の最初に目につくのは、図書館入口にある大きな案内板です。当時の町民会館を増築して開館したという経緯から、建物の正面玄関から入っただけでは図書館入口がわかりにくい場所となっています。玄関ホールを中ほどまで進むと、大きな案内板が図書館の入口へと導いています。

また、当館は高架道路沿いで、入口は二階にあたります。この二階には絵本(含む育児)と児童書及び旅行ガイドを、一階には一般書をおいています。こどもたちには、図書館は本を読んだり借りたりするところ、そして、楽しくなる場所であるところ、ほしいとの思いをこめています。

館内で最初に目にはいるのは、絵本のテーマコーナーです。毎月のテーマ図書を集めたコーナー上部の壁面を利用して、飾り付けをします。

さらに大きなものをおはなしコーナーの壁面に飾っています。この壁面は、縦2m×横6mと縦2m×横4mの壁がL字型に繋がっています。

昨年テーマは、次のようなものでした。

- 一月 新年を迎えて 干支
- 二月 雪遊び
- 三月 春よこい
- 四月 春がいつぱい 新学期
- 五月 端午の節句 こいのぼり
- 六月 雨降り
- 七月八月 海 楽しみがいつぱい
- 九月 運動会
- 十月 実りの秋 果物がいつぱい
- 十一月 実りの秋 おおきなかぶ
- 十二月 トナカイとサンタ



おはなしコーナー

また、おはなしコーナーにはミッキーやプーさんのぬいぐるみ、布絵本を手の届く所に置き、こどもやお母さんがたぐりつるいだ中で利用できるようにしています。

絵本コーナーでは、おはなし会で使用したり地域のケーブルテレビで紹介したりした本の紹介をしています。その際、表紙が見えるように並べています。一覧表で示さず、一工夫した飾り付けでの示し方は、休館日のお知らせや利用ベスト本の紹介などでも行っています。



絵本コーナー

児童書のコーナーでは、いくつかのシリーズ(伝記や○○のみつなど)については、通常の番号・記号にかかわらず一括して書架上に配置しています。

今までの作品で最も大きなものは、牛乳パックハウスでした。夏の図書館こどもまつりで、約三百個の牛乳パックを使い参加者と一緒に行いました。こどもたちに大好評で、四ヶ月も置くことになりました。

これらの品々は、職員が壁面飾りの本などを参考にアイデアを出し合い、色画用紙を主な材料として作りあげていきます。日々の業務に追われる中での作成です。頻繁に作りかえることは難しいため、以前に作ったものを活用したり、おはなし会での作品を利用したりと工夫をしています。最近利用者さんが作られた作品をいただき使用することも増えてきました。

来館された方からの感想を励みに、来月もまた工夫を加えようという取り組みです。これからも、他館のディスプレイを参考にさせていただきたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。



牛乳パックハウス

岡山県大学図書館協議会研修事業
高校図書館の現状報告 について

岡山県大学図書館協議会

研修委員会委員長 藤原 智孝

平成二十年八月に、岡山県大学図書館協議会が主催する研修事業として、「高校図書館の現状報告」をテーマに研修会を行った。研修事業を立案する研修委員会の席上、我々大学図書館職員は高校図書館に関してほとんど何も知らない、研修会の場を利用して高校図書館について教えてもらい、またこの機会に高校図書館の司書さんともお近づきになれれば、という趣旨で始まったことだった。また、大学図書館職員のみならず、高校図書館の司書さんに、大学図書館とその職員について知ってもらう機会に出来れば良い、とも考えた。そのため、通常県内の大学図書館に所属する職員、という参加要件を、高校図書館関係者も出席可とする、ということにした。数度の研修委員会を経て八月二十日、岡山大学附属図書館大会議室にて研修会が開催された訳だが、出席者は大学側十二大学十九名、高校側十三校十三名（講師含む）となった。当初、研修会が平日の午後に行われることから、高校側の参加者はもつと少ない

とみていた。それが十三校からの参加者を得たということで、高校図書館の方々もこうした機会を望んでおられたのだ、と感じた。研修会は、まず高校図書館の実情報告として三名の高校図書館司書の方に、それぞれ高校図書館一般の概要、所属二校の図書館の実例報告をしてもらい、その後質疑応答、大学・高校間での意見交換という流れで進んだ。高校図書館についての情報は、ほとんどが初めて聞く話ばかりで、大いに感銘を受け、また高校図書館の司書さん達の仕事の仕方は、大学図書館の司書とは違う部分も多く、参考にもなった。意見交換では高校・大学とも互いに相手に対して質問・意見を出し合い、それも相互理解に役立つものになったと感じている。これまでに、多くの大学図書館職員は高校図書館とほぼ没交渉に近い状態だったと思われる。今回の研修会がそれを変え、第一歩になったとすれば、望外の幸いとするところである。また、話し合った内容もさることながら、そもそも大学図書館・高校図書館の司書が同じ席について話をする場を持ったということ自体が十分に価値のあることだったのでないだろうか。この一回で終わりとせず、今後定期的にも、あるいはそれぞれ個別にでも、高校図書館の方々と連絡を

取り合っていければ、と願う次第である。

事務局から

●岡山県図書館協会活動報告●

二月十三日（金）

平成二十年度製本講習会

（参加者五十二名）

キハラ（株）の高尾斎氏、溝口智彦氏の両名を講師にお迎えし、製本講習会が開催されました。

毎年好評な製本講習会ですが、今回も多く参加があり、本の製本や図書の簡易補修の実技を行いました。

皆さん熱心に取り組まれ、御自分で製本した完成品を満足そうに持ち帰る方も見受けられました。



●会費の納入について●

今年度の会費の納入はお済みでしょうか。

未納の方は、早急にお納めくださいますようお願いいたします。

振込先

中国銀行県庁支店

普通預金 一三九二三六九

「岡山県図書館協会

事務局長 森山 光良」

●編集後記●

この会報の発行をもって、二十年の協会の事業を全て終えることができました。

企画委員の皆さん、会報にご執筆頂きました方々には大変お世話になりました。

平成二十一年三月三十一日

〒七〇〇一〇八二三

岡山市丸の内二一六―三〇

岡山県立図書館

メディア・協力課 図書館協力班内

岡山県図書館協会

会長 西山 猛

（〇八六）二二四―二二六九